

千刈狸の呟き

意識と知識

先日ある製薬会社の講演会で薬とは直接関係のない内容の講演「患者へのアプローチ」があり、なかなかためになったと思い、なにやら呟いてみたくなった。

新患が来たとしよう。検診か何かで血圧が高めで家族に行つてこいと言われて仕方なく来てみたような人。今までは、まず「血圧が高いと動脈硬化が進みいつかは脳梗塞や心筋梗塞になってしまいますよ」、「血圧が高くても症状は何もないから説明するのに困るのですよ」、とかもっぱら高血圧の知識を話していたような気がする。時には脅したりしながら説明するのだが今ひとつ乗ってこないのだ、こんなにいろいろ説明しているのに。本人はあくまで症状がないから自分は健康、なんともないと思っているのだろう。

そういえばこんなこともあった。以前勤務していた総合病院でのこと。人間ドック担当のとき、市議会議員をしている人であった。糖尿病が明らかだった。これは大変、すぐ治療を開始したほうがいいですよ。と言ったが返事を聞いて唖然としてしまった。なんとその議員曰く「イヤー、今痛くもなんともないから症状が出てから治療はやればいいでしょう。」と。「いまから始めた方がいいですよ。そのためにドックを受けたのではないのですか。胃がんだって症状が無いとき発見できれば治る確率が高いのですよ。」と重ねて説明した。しかしその議員氏はなお頑固にこんな台詞を述べられた。「イヤー、ドックを受けたのは支援者が五月蝿いからで、結果はどうでもいい」のだそうだ。これにはさらにびっくりしてしまった。そして呆れた。そもそも議員たるや、先を見通し、計画し予算を決めていくのではないのか、こんな馬鹿な（失礼）議員ばかりだから世の中良くならない。そのときは議員のドックの補助がどれだけ出たか知らないが、税金の無駄遣いこの上ない。因みに当時の国鉄はかなりの補助を受けてドック受診が多かったような。そのわりに本人のありがたみはいまひとつのような気がした。かなり脱線してしまつた。呟き、ぼやき……。

さてこういう人達は病気それ自体が自分とは関

係ないと考えているのだという。それを図にすると自分と病気が重なっていない。重なっている人の場合は症状もあり本気で病気を考えている、そんなイメージだという。重なっている人に対するアプローチは知識を伝えるやり方でも、納得して治療が進むことが多い。しかし自分と病気が重なっていない場合は少し違ったアプローチのしかたもあるという。

それに対するまずい方法として

- 1) 相手の悪いところを見つけようとする
- 2) 専門家として何か教えようとする
- 3) やさしくおどして生活習慣を変えさせようとする
- 4) 過去を否定しようとする

などであるという。確かに患者としてはこういう態度で話されると反発を覚えるかもしれないし、二度と話を聞きたくはないだろう。自分自身このように患者に接してきていたかもしれない。患者の本音の部分は見えにくいものと理解し、患者の思いを引き出しながら、病気を意識させるようにもって行く必要がある。時間がかかりそうだが。

思いを引き出すたずね方としては

- 1) 目標設定を聞く「5年後どんな自分でいたいですか？そのためには必要なことは何ですか」
- 2) 将来の予測をしてもらつて「今の生活を続けていくと、5年後どんな自分だと思いますか」
- 3) 周囲の評価を聞く「あなたが一番大切な人はあなたの病気のことをどのようにとらえていると思いますか」
- 4) プラス面を確認「あなたがこの病気であつたものは何ですか」

などが挙げられている。

患者により様々な手を持つことは重要で、今後の診療に役立つかも知れない。

知識狸